JLTA Newsletter No. 55
日本言語テスト学会
The Japan Language Testing Association

JLTA Newsletter No. 55　　発行代表者：渡部良典　　2023 年 (令和 5 年) 9 月 30 日発行
発行所：日本言語テスト学会 (JLTA) 事務局
〒036-8560 青森県弘前市文京町 1
弘前大学教育推進機構教養教育開発実践センター
横内裕一郎研究室 TEL: 0172-36-2111（代表）
e-mail: u16yoko@gmail.com URL: http://jlta.ac

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

AI時代の言語テストの進化：認識論と世界観を核にした新しいアプローチ

小張　敬之（Globiz Professional University）

オックスフォード大学の数学者である John Lennox 教授は，彼の学生たちに，三つの重要な哲学的な問いを投げかけていると言われています。

（1）　Where do we come from？
（2）　What are we here for?
（3）　What is the meaning of our existence?

これらの問いかけは，私たちの知識の基盤となる認識論と，私たちが持つ世界に対する解釈や信念，すなわち世界観と深く結びついています。

認識論は私たちが知識を得る方法や，その知識の性質に関する学問です。一方，世界観は私たちが存在する世界をどのように解釈し，理解するかという個人的な視点や信念を示します。Lennox 教授の提起する三つの問いは，これらの概念を中心に，私たちがどのように世界を理解し，そしてそれをどのように評価するかということについての考察を促しています。

学生時代の私は，テストという名の下での評価に常に不安を感じていました。一つのテストが私の能力や価値を正確に反映しているのか，疑問を持ちつつも，それが「知識」の正確な評価方法であると信じて疑わなかったのです。しかし，歳を重ねるにつれ，完全なテストは存在しないし，私たちの認識論や世界観，さらには社会的・文化的背景に大きく影響されていることを理解するようになりました。

現在，私たちは Society 5.0 や Web 3.0 という新しい時代の門前に立っています。この時代は，AI や多次元技術といった先進技術の急速な発展と普及によって特徴づけられています。これらの技術の進化は，言語テストの方法やアプローチにも革命をもたらしており，学習者の多様性や背景を尊重し，それに応じた個別化された評価が可能になってきました。

この進化の中で，言語テストも変わりつつあります。伝統的な 2D のテスト形式から，3D や VR を活用した新しい形式のテストへの移行は，言語テストの可能性を飛躍的に広げています。このような環境の中で，Multimodal な評価，すなわち音声や映像，3D 空間でのインタラクションを統合した評価手法の必要性が増

してきています。

さらに，近年の Big Data の進化と AI 技術の発展に伴い，学習者の行動や成果をデータとして収集し，分析する Learning Analytics の活用が注目されています。これにより，学習者の能力や進捗をリアルタイムで把握し，より精密な評価やフィードバックが可能となってきました。

結論として，John Lennox 教授が提起する哲学的な問いと，現代の技術的進化は，私たちが言語テストの未来を設計する上での大きなヒントを提供しています。私たちは，認識論と世界観を核として，新しい時代の技術的変革を取り入れながら，言語テストがどのように進化すべきかを考え続ける必要があります。

「人間の能力」を測定することは不可能であるし，テストが人を不幸にするような方向に向かってはならないと思います。人の与えられた能力によって，人生の幸・不幸は決まらないし，人間の存在の価値は誰も同じであり，評価によって人間の尊厳性を失うことがあっては決してならないと思います。

「人間の真の能力を測定することは困難であり，テストが人々の心に不安や不満をもたらすことは避けるべきです。私たちの持つ固有の才能や能力だけで人生の質や幸福が決まるわけではありません。全ての人は等しく価値があり，その尊厳はいかなる評価によっても失われることのないものであると強く信じています。」

2022 年度日本言語テスト学会 著作賞 受賞者から
Message from the Recipient of The 2022 JLTA Best Book Award

受賞者　根岸雅史（東京外国語大学），印南洋（中央大学），金子恵美子（会津大学），小泉利恵（清泉女子大学），酒井英樹（信州大学），長沼君主（東海大学）著書：投野由紀夫・根岸雅史（編著）

この度，拙著『教材・テスト作成のための CEFR-J リソースブック』（2020 年，大修館書店）が 2022 年度日本言語テスト学会著作賞を受賞し，大変光栄に思います。拙著を推薦してくださった方々，選考してくださった著作賞選考委員の方々に感謝申し上げます。

このお話をいただいて思ったのは，本書は投野由紀夫さんとの共編であり，他にも多くの著者がいるため，受賞対象が私一人でいいのかということでした。そこで，まずこの点について確認したところ，この賞は JLTA の会員である印南洋さん，金子恵美子さん，小泉利恵さん，酒井英樹さん，長沼君主さん（五十音順）も受賞対象であるとのことで，ほっとしました（ただし，残念ながら，共編者の投野さんは JLTA の会員ではないため受賞対象ではないとのことでした）。

まず，この出版物は，長年にわたる CEFR-J プロジェクトの成果であるということを強調させていただきたいと思います。CEFR-J プロジェクトのもととなったのは，2004 年に始まった「基盤研究(A):『第二言語習得研究を基盤とする小，中，高，大の連携をはかる英語教育の先導的基礎研究』（研

究代表者：小池生夫）でした。この科研が始まったときには「第二言語習得研究」をもとにするとはいえ，どうすれば「小，中，高，大の連携」を図れるのか，まさに五里霧中といった感じでした。

しかし，CEFR との出会いがこうした状況を一変させてくれました。そこから，私たちの研究プロジェクトは CEFR を中心に展開し始め，長い議論の末 CEFR を日本の英語教育に適応させることにより，「小，中，高，大の連携」を図ることを決定しました。2008 年，私たちは CEFR-J として，最初の Can Do ディスクリプタのリストを発表しました。それ以来，私たちは科学研究費補助金＜基盤研究 A＞（2008-2012，2012-2015，2015-2020，2020-2024）を 4 回獲得しました。この間，40 名を超える CEFR-J プロジェクトメンバーが参加し，それらのメンバー一人一人の努力により，ここまで来ることができました。

この間，私たちは CEFR-J の Can Do ディスクリプタ，CEFR-J に基づく言語資源，CEFR-J に基づく英語テストなどを開発してきました。CEFR はヨーロッパで生まれた参照枠ですが，私たちが行った研究は組織的で大規模な CEFR の localisation の一例として，国内外から注目を集めてきています。

本書では，Part 1 は「CEFR-J の基礎知識」，Part 2 は「CEFR-J RLD （参照レベル記述）プロジェクトの概要」，Part 3 は「CEFR-J RLD 資料に基づく指導・教材作成」について書かれています。CEFR-J RLD は CEFR-J の各レベルにどのような文法項目や語彙項目が対応しているのかを調べたものですが，これは教材やテストの作成には非常に重要な資料となっています。

Part 4 の「CEFR-J に基づくテスト・タスク作成」では，各レベルに対応したタスクやテストを開発手法について解説しています。CEFR と言語テストの関連付けには 2 つのアプローチがあります。ひとつは，既存の言語テストをスタンダード・セッティングによって CEFR のレベルに関連付ける方法です。もうひとつは，尺度化された CEFR の Can Do ディスクリプタに基づいてテスト項目を開発し，その結果を検証する方法です。本書では，この後者の方法が詳述されています。

このアプローチで開発されたテスト項目は，CEFR-J のウェブサイト (http://www.cefr-j.org/)で公表されています。しかし，これらはいわゆる「最終版」として確定したものを公開しているわけではありません。ここでは，改良されたテストや言語資料，新しい研究成果を常にアップデートしています。今回受賞対象となった『教材・テスト作成のための CEFR-J リソースブック』で私たちのプロジェクトを概観していただいた上で，私たちの最新の成果をこちらのサイトで確認していただき，私たちの研究活動を見守っていただければ幸いです。

改めまして，この度はこのような賞をいただき，誠にありがとうございました。

2022 年度日本言語テスト学会
最優秀論文賞
受賞者から
Message from the Recipient of
The 2022 JLTA Best Paper Award

受賞者　小泉　利恵（筑波大学）・印南　洋（中央大学）
Rie Koizumi (University of Tsukuba) & Yo In'nami (Chuo University)

私たちの共著論文“Assessing functional adequacy using picture description tasks in classroom-based L2 speaking assessment”（「教室内第二言語スピーキング評価における絵描写タスクを用いた機能的適切さの評価」;

https://doi.org/10.20622/jltajournal.25.0_60）が最優秀論文賞に選ばれ，大変光栄に思います。ジャーナルの査読者，編集者，また論文賞審査員の方々に御礼申し上げます。また，本論文の基盤となった考え方をご指導くださった，二人の筑波大学での指導教官の望月昭彦先生，さらにデータ収集や分析にあたりご支援くださった，片桐一彦先生，輿水以久子先生，深澤真先生，小山田友美氏，また公益財団法人 日本英語検定協会の方々にもお礼を申し上げます。今後も皆様から教えていただきながら研究と実践を続けていきたいと思います。ありがとうございます。

We are honored to have received the prestigious JLTA Best Paper Award for our co-authored paper titled “Assessing functional adequacy using picture description tasks in classroom-based L2 speaking assessment,” which appeared in *JLTA Journal*, *25* (https://doi.org/10.20622/jltajournal.25.0_60). We are grateful to the two anonymous journal reviewers, the Editor, and the members of the JLTA Best Paper Award Committee. We also wish to express our deep appreciation to Akihiko Mochizuki, our supervisor at the University of Tsukuba for seven years, for guiding us along an academically rigorous path. Furthermore, we acknowledge the invaluable assistance provided by Kazuhiko Katagiri, Ikuko Koshimizu, Makoto Fukazawa, Yumi Koyamada, and the Eiken Foundation of Japan during many phases of our research.

We are also thankful to JLTA. We became members of JLTA in 1999, when the Language Testing Research Colloquium (LTRC) was held in Tsukuba, primarily organized by JLTA (for more background, see e.g., Kubota et al., 2022; Watanabe et al., 2016), and when Professor Youichi Nakamura encouraged us to join the association. We thoroughly enjoyed the conference presentations, engaged in academic discussions with participants, and even had the opportunity to take pictures with esteemed researchers, notably Professor Lyle F. Bachman. At that time, we were reading his masterpiece *Fundamental considerations in language testing* (Oxford University Press, 1990) at a study session, struggling to grasp the complexities of language assessment. The interaction with Professor Bachman fueled my (Rie's) desire to delve deeper into this field. Since we joined JLTA, we have had the privilege of publishing our papers in *JLTA Journal* and presenting our work at JLTA annual conferences. These experiences allowed us to connect with great researchers who later became our friends and colleagues. We also served as organizers for conferences and JLTA events. As we continue to evolve as language assessment researchers and practitioners, JLTA has remained a steadfast source of guidance and support.

The paper for which we received the JLTA Best Paper Award has two main characteristics: First, it focused on the development and evaluation of a rating scale for *functional adequacy*, designed for both classroom and research applications. The dataset partially

overlaps with that used in our prior work, Koizumi and Katagiri (2009), which exclusively explored linguistic aspects of speaking, that is, complexity, accuracy, and fluency (CAF). We hope that our paper has drawn attention to the concept of functional adequacy, or successful task fulfilment, which includes Task requirements, Content, Comprehensibility, and Coherence and cohesion (Kuiken & Vedder, 2017). These components are indispensable in understanding learners ' learning processes and outcomes. We wanted to publish our research in *JLTA Journal* because methods for assessing speaking at Japanese primary and secondary schools have garnered significant attention among teachers nowadays. We believe the field of language assessment can contribute both theoretical frameworks and practical approaches to developing, using, and evaluating a rating scale of successful task fulfilment, particularly in the context of measuring the ability to think, judge, and express ideas in English (National Institute for Educational Policy Research, 2021).

The second distinguishing characteristic of our paper is our commitment to Open Science. We have uploaded supplementary materials related to our research to the Open Science Framework (https://osf.io/ubwnr/). In the "Files" section, located on the lower-left side of our repository homepage, you will find two files containing supplementary materials for our study. Both files contain identical information. For example, if you click on the pdf file, you will see Supplementary Materials A through D. Supplementary Material A contains detailed guidelines for scoring functional adequacy. Supplementary Material B contains FACETS Input for Anchored Estimation. Supplementary Material C contains FACETS Output in Anchored Estimation. Supplementary Material D contains FACETS Output in Anchored Estimation. These supplementary materials serve as a valuable resource for researchers seeking more details on the study, beyond what was feasible to include in the paper due to word limit restrictions. Finally, on the lower-right side of our repository homepage, you will find the "Recent Activity" section. Any changes made to your repository are recorded by OSF. This section provides a timestamped record of the changes we made to the repository.

The inclusion of functional adequacy in the test construct and the embrace of Open Science practices to enhance transparency and accessibility represent vital strides in advancing the field of language assessment. Once more, we express our gratitude to everyone who supported our journey in language assessment research and pledge our commitment to contribute to this field to the best of our abilities.

References

Koizumi, R., & Katagiri, K. (2009). Changes in speaking performance of Japanese high school students: Longitudinal and cross-sectional studies at a SELHi. *ARELE (Annual Review of English Language Education in Japan)*, *20*, 51 – 60. https://doi.org/10.20581/arele.20.0_51

Kubota, K., Yokouchi, Y., & Koizumi, R. (2022). "Assessment research for the benefit of humanity": An Interview with Randy Thrasher and Yoshinori Watanabe. *Language Assessment Quarterly*, *19*(3), 314 – 334. https://doi.org/10.1080/15434303.2021.1931232

Kuiken, F., & Vedder, I. (2022). The assessment of functional adequacy in language performance. *Journal on Task-Based Language Teaching and Learning*, *2*(1), 1 – 7. https://doi.org/10.1075/task.21009.kui

National Institute for Educational Policy Research (NIER). (2021). *Shido shiryo jirei shu* [Handbook of teaching materials and case examples]. https://www.nier.go.jp/kaihatsu/shidousiryou.html [国立教育政策研究所教育課程研究センター (2021).『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料（小学校外国語編・中学校外国語編・高等学校外国語編）』]

Watanabe, Y., Koizumi, R., Iimura, H., & Takanami, S. (Eds.). (2016). *JLTA Journal 2016 Vol. 19 supplementary: 20th anniversary special issue*. Japan Language Testing Association. https://doi.org/10.20622/jltajournal.19.2_0

Report on

The 55th JLTA Research Seminar

Mar. 25（Sat）, 2023

北海学園大学豊平キャンパス
7 号館 D30 教室

「分散学習とテスト効果を活用した効果的な語彙の指導と学習」

第 55 回日本言語テスト学会研究例会は，北海学園大学において「分散学習とテスト効果を活用した効果的な語彙の指導と学習」というテーマで実施された。特別講演とシンポジウムという 2 本立てで，最新の理論に基づく語彙の指導と学習について，生徒の知識をテストすることの意義や効果的な方法について，多くの知見が紹介された。学習指導要領が変わり，中学高校で学習すべき語彙数が大幅に増え，学習者への負荷が増えているという背景もあり，語彙のより良い学習という重要課題は，英語教員や語彙研究者にとっては大変興味深い課題である。コロナ禍以降初の対面の例会となった今回は 33 名の参加者が参加し，大変活発な意見交換がなされた魅力的な会となった。

初めに特別講演として，立教大学異文化コミュニケーション学部の中田達也先生が「第二言語語彙学習の効果を高める方法―テスト効果と分散効果に着目して―」という題目でご講演された。ご自身の様々なご研究や関連した多くの先行研究を

簡潔にまとめて幅広くご紹介してくださった。テスト効果に関しては，テストを受けることで記憶が強固になるという直接的なテスト効果に焦点を絞って過去の研究の紹介があった。語彙学習においてテストの重要性は言うまでもないが，そのテストの方法には英訳もしくは和訳の記述や英訳もしくは和訳の多肢選択など様々なテスト手法がある。スペリングが重要な場合は記述式のテストが目的に叶っているが，スペリングをさほど重視しない場合，学習効率を考えると多肢選択で十分であるとの説明に，大学で TOEIC などの資格取得のための英語授業を受け持つ筆者の授業では，短期間に非常に多くの語彙を学習させなくてはならないため，多肢選択式を導入するのも一案であると納得させられた。また分散学習の語彙指導への効果があることに加え，遅延フィードバックの効果，累積テストの効果などのご説明もあった。

次に「分散学習とテスト効果を活用した効果的な語彙の指導と学習」というタイトルでシンポジウムが行われた。HELES Vocabulary SIG 代表でもあられる北海道教育大学笠原究先生から HELES Vocabulary SIG についてはじめにご紹介があった。この SIG では特に中高生の語彙学習焦点をあて，研究成果を利用したいという点で日々ご研究に励まれており，今回のシンポジウムでは，Random-selection Test の効果，ペアワークの効果，そして，語彙テスト作成について，それぞれパネリストの北海道教育大学の金山幸平先生，北海道武蔵女子短期大学の岩田哲先生，北海道教育大学の鈴木健太郎先生から説明があった。まず，金山幸平先生からは，最終回に学習した語彙項目のみ分散学習がされないという累積テストでの欠点を補うという点で Random-Selection Test という全ての語彙を学習者に提示し，その語彙に対して複数回のテストを実施するという方法が良いのではないかとご提案があった。岩田哲先生は直後に実施される事後テストでは個別学習を実施した群，遅延テストではペア学習群の成績が良かったことをあげ，授業では初めに個別学習で，短期間でたくさんの語を覚えた後，ペア学習すると長期間の保持につながるのではという研究に基づく考察があった。最後に鈴木健太郎先生はご自身が利用されているエクセルでのテストの作成を紹介してくださり，教員への負担軽減の一案をご紹介くださった。最後に質疑応答ではそれぞれの研究の詳細についての多くの質問がフロアから上がり，本例会は語彙指導の研究者にとっても中高の英語教員にとっても非常に有意義なものである会となった。講師の先生方，企画や運営などご尽力いただいた先生方にも感謝申し上げたい。

報告者　平井　愛（神戸学院大学）

海外の学会・研究会 参加報告
World Conference Reports

大　会：　The 21st Annual Asia TEFL Conference
開催日：　2023 年 8 月 17 日～8 月 20 日
テーマ：　Celebrating ELT in Asia: Visions and Aspirations
開催地：　Daejeon, South Korea

The theme of the Asia TEFL conference was “Celebrating ELT in Asia: Visions and Aspirations.” The conference was held in the Daejeon Convention Center which was located near a tributary of the Geumgang River. There were jogging and cycling paths along the river, and a few conference-goers took advantage of the location to get some morning

exercise. Daejeon is a modern city of 1.5 million people surrounded by mountains. The amalgamation of the novel venue, the new style of post-pandemic conferences, and, of course, the research presentations made this a memorable experience. I left the conference feeling that, in this post-pandemic era, the ELT landscape was changing rapidly.

The conference was hybrid although most participants presented in person. All participants, regardless of whether they would present in-person, were required to record and submit the video of their presentation a month before the conference starting date. Initially, I thought that having to finalize and record my presentation during the last week of the spring semester at university was a considerable inconvenience. Upon reflection though, finishing the presentation early meant that I was prepared to speak at the conference and could travel to South Korea without having to worry about revising my slides or practicing my talk. Additionally, all the presentations remained online until September 17th. This meant that conference participants could observe the presentations they missed. Considering these benefits, conference organizers in Japan might want to consider a similar format.

The conference was a valuable chance to understand about ELT in Asia outside Japan and rethink ELT within Japan. The first plenary address by Youngsuk "YS" Chi, Chairman of Elsevier, set the tone for the conference. Dr. Youngsuk presented his idea of "sustainable" English language teaching which would promote English as a common language in Asia while empowering the region. Using Michelle Yeoh, who recently won an academy award for "Everything Everywhere All At Once," as a case study, he gave his vision of sustainable ELT in Asia. First, he argued that learners need a support system. That is, family or peers who will help them to pursue their dreams. Second, he argued that learners need to adapt to change. He highlighted bold career decisions that Michelle Yeoh had to make when experiencing setbacks. Lastly, he argued that learners need to stay with their true values. Michelle Yeoh, he added, always refused acting roles which involved portraying false Asian stereotypes.

For me, this talk was inspirational. While it recommended that ELT in Asia be amenable to change, it also recommended that it maintains it values. It made me think about English education in Japan and our need to adapt but also maintain what makes ELT in Japan unique.

報告者 James M Hall
(Iwate University)

書評
Article Reviews

『外国語教育研究ハンドブック―研究手法のより良い理解のために［増補版］』竹内理・水本篤（編著）
2023 年 松柏社

本書は書名にもあるように，2014 年に発刊された『外国語教育研究ハンドブック―研究手法のより良い理解のために［改訂版］』の増補版である。したがって，大部分は改訂版と同様の内容となっている。増補された箇所としては，主に以下の 2 点である：①APA 第 7 版に対応している（第 22・23 章等）・②量的研究の発展に伴い，最新の研究手法（ベイズ統計等）に関する記述が追加されている（第 24・25 章）。

全体の構成は第 6 部の全 25 章から成り立っており，第Ⅰ～Ⅲ部及び第Ⅵ部は量的研究，第Ⅳ部は質的研究，第Ⅴ部が論文作成に関する内容となっている。近年様々な分析手法が増えてきているため，外国語教育のデータを実際にどのように分析したら良いのか悩ましい状況があるだろう。そうした悩みを解決するために，本書は非常に有益だと思われる。従来の分析手法（*t* 検定や分散分析等）からベイズ統計等といった最近の分析手法に至るまで幅広く掲載されており，具体的な外国語教育のデータを想定して説明がなされているため，どのような場面で用いたら良いのかをより理解しやすいだろう。本書で使用しているデータは，以下のサイト(https://mizumot.com/handbook/)からダウンロードして実際に手元で分析することも可能であるため，分析の実践的練習にも役立つだろう。本書の説明は SPSS という分析ソフトを用いた説明が主であるものの，上記のサイトから SPSS だけでなく最近の主流となりつつある R を用いた分析の流れも知ることが可能である。各章の最後には「考えてみよう！」という復習問題も記載されており，単に読んで終わるだけでなく学習事項を確認するアウトプットの機会も設けられているため，統計知識をより身に付けやすい点も本書の特徴と言える。なお復習問題の解答例は，松柏社の書誌情報(https://www.shohakusha.com/book_detail/287)のサイトから入手可能である。以下では，各部の概略を簡潔に記す。

第Ⅰ部の「量的研究の心得と基礎」では，研究を行う上で知るべき基礎知識が網羅されている。研究計画や信頼性・妥当性，記述統計・推測統計等，データを分析して解釈する上で必須の知識が記載されているため，研究や分析に詳しくない方は第Ⅰ部に目を通すことが必要不可欠である。第Ⅱ・Ⅲ部の「量的研究の発展」では，*t* 検定や分散分析，ノンパラメトリック検定，カイ 2 乗検定等の頻度データ分析，ピアソン相関や回帰分析等の相関分析，因子分析，多変量解析，SEM，古典的テスト理論や項目応答理論等の言語テスト理論，メタ分析といった具体的な分析手法に関して詳細な説明がなされている。いずれの章においても，各分析が適している具体的な場面や分析実施の前提条件等について平易な言葉で記載されているため，理解しやすい内容・構成となっている。

第Ⅳ部の「質的研究の基礎と展開」は，質的研究の概念，データの収集法の代表例である調査的面接法，データの分析方法としてグラウンデッド・セオリー・アプローチ（GTA），質的研究の新たな枠組みである構造構成的質的研究法(SCQRM)，質的研究に関する Q＆A という内容になっている。質的研究を行う方はもちろんだが，量的研究を主としている方にとっても，量的手法に質的手法を組み合わせる際の方法等のような有益な情報を入手することが可能である。

第Ⅴ部の「論文作成にあたって」では，APA 第7版のスタイルや論文作成時のQ&A等が書かれている。第Ⅴ部を読むだけでも，論文執筆時に知っておくべき重要な APA のルール（引用の仕方，図表の提示方法等）を把握することが可能である。さらに論文執筆の経験が浅い人にとっては，論文作成に関する著者からのアドバイスや注意事項も非常に勉強になるだろう。

増補版である本書のポイントが，第Ⅵ部の「量的研究の新たな発展」である。主にベイズ統計や最新の量的研究の手法・動向に関する内容となっている。近年 *p* 値だけ解釈することの意義が問題視されているため，その打開策として有効であるベイズ統計は今後より一層使用される頻度が高くなってくると予想される。よって，その基礎知識を学習あるいは確認するために本書は有効だろう。その他，線形モデルの発展（一般化線形混合モデル[GLMM]等）についても簡単な説明がされている。ただし本書にも書かれている通り，ベイズ統計やGLMM 等についてより詳しい内容を知りたい方は，本書でも紹介されている①平井他（編著）(2022)『教育・心理系研究のための R によるデータ分析論文作成への理論と実践集』や②田村祐(2021)「一般化線形混合モデルの実践：気をつけたい3つのポイント」(https://speakerdeck.com/tam07pb915/2021-11-06-lmm-and-glmm)等が大変勉強になるだろう。

本書は，外国語教育研究の基礎知識を学びたい方はもちろんのこと，分析に関してある程度知識を有している方にとっても網羅的に分析手法の知識を復習することが可能であるため，非常に役立つ内容であると感じる。したがって，大学生や大学院生，教員や研究員等のような英語教育研究に携わる方々にとって必読の書籍だと思われる。

評者：水書　亮(筑波大学大学院生)

JLTA 事務局より連絡
Messages from JLTA Secretariat

JLTAの活動にご理解とご協力をいただき，誠にありがとうございます。ご質問・ご意見等ございましたらお寄せください。

⑴ 2023 年 9 月 9 日（土）―10 日（日）に**第 26 回全国研究大会**が東北大学川内南キャンパスで開催されました。2019 年ぶりの対面での全国研究大会開催となり，全国研究大会実行委員長である加藤万紀子先生をはじめ，委員の皆様にご尽力いただきましたおかげで，盛会のうちに終了することができました。改めまして感謝の意を表します。ご発表，ご参加いただきました皆様，ありがとうございました。来年度の研究大会の開催につきましては，今後学会 Website，メール，X (Twitter) 等を通じてご連絡差し上げます。
http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page_id=18
X (Twitter): @JLTA_official

⑵ 2024 年 3 月 9 日（土）に**第 56 回 JLTA 研究例会**が下記の内容でオンライン開催される予定です。皆様のご参加をお待ちしております。

【日時】 2024 年 3 月 9 日（土）13:00～16:30（予定）
【主催・発表者】 澤木泰代氏（早稲田大学）
【テーマ】大学英語アカデミック・ライティング授業における要約スキル形成的評価モジュールの活用（仮題）

詳細は決まり次第学会 Webpage，メール，X (Twitter) 等でお知らせいたします。

(3)『**日本言語テスト学会誌**』**第 26 号**は今冬発行予定です。冊子の配送とほぼ同時期に J-STAGE https://www.jstage.jst.go.jp/browse/jltajournal にて公開されます。バックナンバーを含め，ぜひご覧ください。
『**日本言語テスト学会誌**』は，狭義のテスティングに関するものだけではなく，広く評価に関する**論文を募集**しています。教育実践やプログラム評価に関するものなど，評価全般に関わる実験・知見を含みますので，どうぞふるってご応募ください。

(4) 日本言語テスト学会では，2019 年度より「**オンライン投稿審査システム**」を導入しました。このシステムは，2014 年度から学会業務の一部を委託してきた国際文献社が持つもので，投稿と査読の過程がオンライン上に記録されます。さらに，学会誌の一層の質の向上を目指して，既に出版された論文のデータベースを使った投稿論文の剽窃の確認や，著者による論文の匿名化の再確認もシステムの中で行います。2024 年度もこのシステムを使って投稿を受け付けます。詳細は次の通りです。

オンライン投稿審査システムに関する詳細

1．システムのウェブサイト
https://iap-jp.org/jlta/journal/login

2．投稿期間
2024 年 4 月 7 日～2024 年 5 月 7 日

3．学会誌執筆要領・テンプレート
本システムの導入等により一部変更があります。最新の執筆要領やテンプレートをご参照ください。
http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page_id=62

4．問い合わせ先
日本言語テスト学会誌　編集事務局
jlta-edit@bunken.co.jp

(5) **JLTA 研修講師派遣事業**が 2017 年度から始まりました。本事業は，テスト利用・作成に関わる研修を行う機関・団体に JLTA より講師派遣を行うものです。会員の皆様におかれましては，言語テスティングにご興味のある方々へご周知くださいますようお願いいたします。
ウェブサイト：
http://jlta2016.sakura.ne.jp/?p=929

(6) **J-STAGE** (https://www.jstage.jst.go.jp/browse/jltajournal) における『日本言語テスト学会誌』のアクセス状況（2022 年 8 月～2023 年 7 月）について報告します。上記期間の書誌への総アクセス数，PDF ファイルへの総アクセス数は，それぞれ 10,908 件と 10,291 件となっています。昨年度に比較するとそれぞれ約 500 件減少していますが，一定のアクセス数は維持しており，学術的な貢献はできていると考えております。
国別のデータによると，主なアクセス国に大きな変化はなく，アメリカ，日本，中国からのアクセスが大部分を占めております。近年の傾向とは異なる部分として，書誌へのアクセス数第４位にアイルランドが加わっております。PDF へのアクセスがほとんどないことから，日本語教育に関する情報を求めてアクセスが増えたのではないかと推察しております。

ダウンロード先とアクセス数

旧：2021/08～2022/07

	国名	書誌事項	国名	PDF
1	アメリカ	3280	日本	3367
2	日本	2213	アメリカ	2702
3	中国	929	ドイツ	885
4	カナダ	726	中国	632
5	ドイツ	655	ロシア	250
6	イギリス	217	カナダ	239
7	ロシア	213	イギリス	214
8	香港	197	フィリピン	201
9	韓国	194	インド	184
10	フランス	145	フランス	161

新：2022/08～2023/07

	国名	書誌事項	国名	PDF
1	アメリカ	3867	日本	3515
2	日本	2596	アメリカ	2637
3	中国	797	中国	933
4	アイルランド	746	ドイツ	375
5	ドイツ	538	フィリピン	291
6	カナダ	463	イギリス	241
7	イギリス	195	フランス	210
8	韓国	171	オランダ	112
9	香港	168	インド	111
10	ブルガリア	152	カナダ	92

(7) 本学会ウェブサイトには，Web 公開委員会が公開を進めてくださった**チュートリアルとワークショップ・ビデオ**があります。どうぞご活用ください。
ウェブサイト：
http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page_id=808

WORKSHOP VIDEO/WEB TUTORIAL

チュートリアル（Tutorial，日本語）

- 「よい」テストの条件（What is a ‘good’ test?: validity, reliability, and practicality)
- テストの構成概念（The concept of test constructs)
- テスト細目（Test Specification)
- リーディングテスト（Testing Reading-6 basic test formats-)
- リスニングテスト（Testing Listening)
- ライティングテスト（Testing Writing)
- スピーキングテスト（Testing Speaking)
- 語彙・文法テスト（Testing Vocabulary & Grammar)
- 測定の標準誤差（Standard Errors of Measurement)
- 効果量とは？（What is the ‘Effect Size’?)
- 学習に役立つテスト結果の報告（Test result reporting to enhance learning)
- 古典的テスト理論（Classical Test Theory)
- 確認的因子分析（Confirmatory Factor Analysis)
- メタ分析（Meta-Analysis)
- 質的方法（Qualitative Methods)

ワークショップ・ビデオ（主に日本語）

2014

- Workshop 1 – CAT の基本的な考え方（スライド）
- Workshop 2 – J-CAT（スライド 1,スライド 2,スライド 3）

2015

- Workshop 1 – テストデータ分析入門（in English）
- Workshop 2-1 – 生徒の力を伸ばす定期テストの作り方―妥当性と信頼性に留意して（スライド）
- Workshop 2-2 – How to Develop Tests that Improve Students’ English Proficiency（スライド）

2016
・Workshop 1-1 初めて学ぶ効果量－入門編（スライド）
・Workshop 1-2 初めて学ぶ効果量－理論編（スライド）
・Workshop 1-3 初めて学ぶ効果量－実践編（スライド）

2017
・Workshop – テキストマイニングを使った自由記述式アンケートの分析

2019
・Workshop – ベイズ統計とその外国語教育研究への応用（前半）
・Workshop – ベイズ統計とその外国語教育研究への応用（後半）
・配布資料

2021
・JLTA 2021 Workshop – 自律的学習者を育成する中学校外国語科授業の実際（前半）
・JLTA 2021 Workshop – 自律的学習者を育成する中学校外国語科授業の実際（後半）
・配布資料

2023
・JLTA 2023 Workshop – R を用いた一般化線形混合モデル（GLMM)の分析手法を身につける – 言語研究分野の分析事例をもとに –（前半）
・JLTA 2023 Workshop – R を用いた一般化線形混合モデル（GLMM)の分析手法を身につける – 言語研究分野の分析事例をもとに –（後半）

(8) **JLTA 最優秀論文賞授賞式**

9 月 9 日に東北大学で開催された日本言語テスト学会（JLTA）第 26 回全国研究大会において，小泉利恵・印南洋両氏の JLTA Journal 掲載論文 "Assessing Functional Adequacy Using Picture Description Tasks in Classroom-Based L2 Speaking Assessment" に 2022 年度最優秀論文賞が授与されました。改めましてこの度の受賞おめでとうございました。

(9) **JLTA 著作賞の推薦について**

JLTA では 2020 年度より「**JLTA 著作賞**」の表彰を行っています。推薦図書がある場合は，以下のページにある規程・テンプレートをご確認・ご記入の上，著作賞選考委員長へ送付ください。なお，2024 年度の締め切りは 2024 年 3 月 31 日となっております。送付先等詳細は，以下リンクをご参照ください。
http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page_id=1618

(10) **2023 年度 JLTA 著作賞受賞者**

2023 年度の著作賞は，選考委員会による審議の結果，「受賞なし」となりました。引き続きのご推薦をどうぞよろしくお願いいたします。

(11) **学会会則の改訂について**

2023 年 9 月 9 日に開かれた会員総会にて学会会則の改訂が提案されました。学術団体として，より厳格なルールに従って運営していくために，条項の整理や，会長・理事の選出方法に関する部分を中心に，弁護士に相談しながら議論を進めております。今後，メールを通して，改訂案についてご審議いただく形で進めさせていただく予定です。承認が必要な形でご審議頂く場合もございますので，本件について案内差し上げた際は，できる限り審議に

ご参加くださいますようお願いいたします。

(12) **言語評価に関するイベント情報**

情報提供いただきました研究会や講演などに関する情報を記載いたします。ご参照ください。

筑波大学大学院英語教育サブプログラム第２回フォーラムと進学相談会

【日時】 10 月 7 日（土）17:00～19:00
＊Zoom によるオンライン開催
【内容】
Part 1: 講演「シャドーイングの理論・効果・活用方法」
Part 2: 大学院進学の相談会
サブプログラムのコース・入試説明と相談会
【講演者】
Part 1: 濱田陽（秋田大学高等教育グローバルセンター准教授）
【定員】
100 名（要予約）
【申し込み】
メールの件名を「フォーラム・進学相談会申し込み 10/7」とし、本文にご所属、氏名、「フォーラム」「相談会」「両方」のいずれを希望するかを明記の上、下記メールアドレスに宛に送信してください。Zoom URL を返信します。
【詳細情報】 下記リンク
https://www.modernlc.tsukuba.ac.jp/sp_ele/
【問い合わせ】
土方裕子（筑波大学准教授）
hijikata.yuko.fe@u.tsukuba.ac.jp

第１回言語学習評価研究会

【日時】 11 月 3 日（金）14:00～16:20
＊Zoom によるオンライン開催
【テーマ】「学習につながるスピーキング評価に向けた研究と実践」
【内容】
研究発表（Part 1）・シンポジウム（Part 2）
【発表者】
Part 1:
小泉 利恵（筑波大学教授）
深澤 真（琉球大学准教授）
Part 2:
初澤 晋（宮城県石巻高校教諭）
上原 美咲（千葉県柏市立柏の葉中学校教諭，筑波大学大学院 長期研修生）
澤井 奈生子（千葉県柏市立富勢小学校教諭，筑波大学大学院 英語教育学サブプログラム 博士課程前期院生）
【申し込み】 下記リンク
https://forms.gle/jpkPWiPb96Vua21B9
【締め切り】 11 月 1 日（水）
【問い合わせ】
深澤真（琉球大学准教授）
fukazawa@edu.u-ryukyu.ac.jp

第 42 回 筑波大学 現代語・現代文化フォーラム

【日時】 11 月 3 日（金）16:40～17:40
＊Zoom によるオンライン開催
【題目】「英語テストにおける合理的配慮：申請と実施において考慮すべきこと」
【発表者】
井上千尋（英国ベッドフォードシャー大学）
【定員】
300 名（要予約）
【申し込み】 下記リンク
https://forms.gle/jpkPWiPb96Vua21B9
【締め切り】 11 月 1 日（水）
【問い合わせ】
深澤真（琉球大学准教授）
fukazawa@edu.u-ryukyu.ac.jp

Forum at the Univ. of Tsukuba
43rd Forum of Modern Languages and Cultures

【Date & Time】
December 2, 2023 (Saturday), 10:00 to 11:00 (20:00 to 21:00, Central Daylight Time)
Online Zoom lecture

【Guest speaker】
Xun Yan (Associate Professor of Linguistics, University of Illinois Urbana-Champaign)

【Title】
"Rater behavior and development in performance-based language assessment"
（言語パフォーマンス評価における評価者の行動と発達）

【Registration】
https://forms.gle/PY9uQ4CW28xCaupn7

【Deadline】
November, 30 （Thursday）

【Contact】
Rie Koizumi (Professor, University of Tsukuba)
Koizumi.rie.ge@u.tsukuba.ac.jp

清泉女子大学 言語教育研究所フォーラム 2023

【日時】 11 月 11 日 (土)14:00～16:00
＊Zoom によるオンライン開催

【演題】「Society 5.0 における AI の役割: 英語教育の最前線」

【内容】 外国語学習における AI

【講師】 小張敬之（グローバル Biz 専門職大学教授・青山学院大学名誉教授）

【参加費】 無料 （要予約）

【申し込み】 下記リンク
https://forms.gle/5aYTzufUP56ppyXWA

【締め切り】 11 月 5 日（日）

【問い合わせ】
言語教育研究所
gengo-rcp@seisen-u.ac.jp

(13) **その他確認のお願い**

● 会員情報や会費納入状況の確認・修正ができる「マイページ」はご利用いただいていますでしょうか。ログインに必要な会員番号やパスワードを紛失された方は以下からお問い合わせください。
https://www.bunken.org/jlta/mypage/Contact

● 所属や書類発送先のご住所など登録情報に変更がある場合，上記マイページにてご自身で登録情報の変更を３月末までにお願いいたします。
特に，メールアドレス，住所（自宅・勤務先）の変更がある場合，確実に変更手続きをしていただくようお願いいたします。

● 学生会員の方は，毎年学生証のコピーを会員状況確認のためご提出お願いいたします。

● 2022・2023 年度の会費振込について，これからの方は早急によろしくお願いいたします。2022 年度分のお支払いがない場合には，2024 年 4 月より送付物の発送や電子メールの配信がなくなり，マイページの使用もできなくなります。

● 本会の退会を希望される方は，事務局（jlta-post@as.bunken.co.jp）へご連絡をお願いいたします。

文責：
JLTA 事務局長　横内裕一郎（弘前大学）
JLTA 事務局次長　藤田亮子（順天堂大学）
久保田恵佑（福島県立医科大学）
前田啓貴（松山大学）

日本言語テスト学会（JLTA）公式
X (Twitter)アカウント: @JLTA_official
https://twitter.com/JLTA_official

Messages from the Secretariat

We are thankful for your support and commitment to JLTA's activities. Please send us any comments or inquiries you have. Also, please see our English website for more details: http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page_id=599

(1) **The 26th JLTA Annual Conference** was held at Tohoku University Kawauchi-south Campus on September 9 (Sat)–10 (Sun), 2023. It was the first face-to-face annual conference since 2019. We would like to sincerely thank Dr. Makiko Kato, chairperson of the Annual Conference Executive Committee, and all the committee members. Furthermore, we would like to thank everyone who gave a presentation and participated in this conference. Regarding the next year's conference (2024), we will share the schedule via the JLTA website, e-mail, and X (Twitter). For the latest information, please visit https://jlta2016.sakura.ne.jp/?page_id=18 or on the official X (Twitter) account (@JLTA_official).

(2) **The 56th JLTA Research Meeting** will be held online (using Zoom) on the following date and time. We look forward to your participation.

【Date & Time】
Saturday, March 9, 2024, 13:00–16:30 (tentative)
【Main Presenters】
Yasuyo Sawaki (Waseda University)

Details will be announced via the JLTA website, e-mail, and X (Twitter).

(3) **The *JLTA Journal* (vol. 26)** is currently in the printing process and will be sent to members' registered postal addresses soon. Previous volumes have been uploaded to J-STAGE (https://www.jstage.jst.go.jp/browse/jltajournal). We encourage you to visit this website and explore the back issues.
The *JLTA Journal* invites various types of contributions that include studies related to evaluation in a broader sense, such as classroom-based practice and program assessment that deal with issues and topics on testing and assessment.

(4) We have introduced an "**Online Submission and Review System**" since the academic year 2019. This

system is organized by the International Academic Publishing Co., Ltd., which JLTA has commissioned part of JLTA's administrative work since 2014. Within this system, all submission and review processes will be recorded online. Furthermore, to improve the JLTA Journal's quality, submitted manuscripts will be checked for plagiarism using a database of published articles and for anonymity using human resources.

Details about JLTA Online Submission and Review System

1. Website
https://iap-jp.org/jlta/journal/login

2. Submission period in 2024
We only accepted submissions during the following period:
April 7, 2024 to May 7, 2024

3. The Guidelines for Contributors and Templates
The Guidelines for Contributors to the *JLTA Journal* and Templates have been revised due to the introduction of the system and other changes. Please see and follow the latest guidelines and templates before submission, which are located at: http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page_id=62 for details.

4. Contact information of the JLTA editing office:
jlta-edit@bunken.co.jp

(5) We have been working on the **JLTA Training Lecturer Dispatch project** since 2017, which aims to send a lecturer from JLTA to institutions and organizations wanting to hold a training session or meeting on test development and use. Please feel free to convey this information to those who may be interested.
Website:
http://jlta2016.sakura.ne.jp/?p=929

(6) **J-STAGE**
We report on the access status of *JLTA Journa*l articles on J-STAGE (August 2022 – July 2023) (https://www.jstage.jst.go.jp/browse/jltajournal). The total number of accesses to the bibliography and PDF files during the above period was 10,908 and 10,291, respectively. In comparison to the previous fiscal year, the number of accesses decreased by about 500 each, but the number of accesses has been maintained at a certain level. So, we believe that we have been able to make academic contributions.
According to country-by-country data, there has been no significant change in the main access countries, and access is mostly from the United States, Japan, and China. One noteworthy aspect of the trend in recent years is that Ireland has been added to the fourth place in the

number of accesses to the bibliography. Since there is almost no access to PDF, we presume that access to information on Japanese language education has increased.

旧：2021/08～2022/07

	国名	書誌事項	国名	PDF
1	アメリカ	3280	日本	3367
2	日本	2213	アメリカ	2702
3	中国	929	ドイツ	885
4	カナダ	726	中国	632
5	ドイツ	655	ロシア	250
6	イギリス	217	カナダ	239
7	ロシア	213	イギリス	214
8	香港	197	フィリピン	201
9	韓国	194	インド	184
10	フランス	145	フランス	161

新：2022/08～2023/07

	国名	書誌事項	国名	PDF
1	アメリカ	3867	日本	3515
2	日本	2596	アメリカ	2637
3	中国	797	中国	933
4	アイルランド	746	ドイツ	375
5	ドイツ	538	フィリピン	291
6	カナダ	463	イギリス	241
7	イギリス	195	フランス	210
8	韓国	171	オランダ	112
9	香港	168	インド	111
10	ブルガリア	152	カナダ	92

(7) Our website has various useful content for the public. It is our Web Publication Committee that is responsible for the creation and organization of content. Since some of the content posted is in English, we hope you use them to the fullest.
Website:
http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page_id=808

WORKSHOP VIDEO/WEB TUTORIAL

Tutorial (in Japanese)

- What is a 'good' test?: validity, reliability, and practicality
- The concept of test constructs
- Test Specification
- Testing Reading-6 basic test formats
- Testing Listening
- Testing Writing
- Testing Speaking
- Testing Vocabulary & Grammar
- Standard Errors of Measurement
- What is the 'Effect Size'?
- Test result reporting to enhance learning
- Classical Test Theory
- Confirmatory Factor Analysis
- Meta-Analysis
- Qualitative Methods

Workshop Videos

2014 (in Japanese)
- Workshop 1 – Basic Concepts of CAT
- Workshop 2 – J-CAT

2015
- Workshop 1 – Introduction to Test Data Analysis (in English)
- Workshop 2-1 – How to Develop Tests that Improve Students' English Proficiency (in Japanese)
- Workshop 2-2 – How to Develop Tests that Improve Students' English Proficiency (in Japanese)

2016 (in Japanese)
- Workshop 1-1 Introduction to Effect Size: Basic Concepts and

Practices (Beginning Guide)
・Workshop 1-2 Introduction to Effect Size: Basic Concepts and Practices (Theoretical Guide)
・Workshop 1-3 Introduction to Effect Size: Basic Concepts and Practices (Practical Guide)

2017 (in Japanese)
・Workshop – An Analysis of Free Descriptive Questionnaire by Text Mining

2019 (in Japanese)
・Workshop – Bayesian Statistics and its Application to Foreign Language Education Study
・Handouts

2021 (in Japanese)
・JLTA 2021 Workshop – Practice of Junior High School Foreign Language (English) Classes for Developing Autonomous Learners
・Handouts

2023 (in Japanese)
・JLTA 2023 Workshop – Acquiring Analytical Methods for Generalized Linear Mixed Models (GLMMs) Using R: Based on Examples of Analysis in the Field of Linguistic Research

(8) **The Best Paper Award 2022**

At the 26th JLTA Annual Conference held at Tohoku University on September 9, Dr. Rie Koizumi and Dr. Yo In'nami were awarded **the Best Paper Award 2022** for the following research paper: *Assessing Functional Adequacy Using Picture Description Tasks in Classroom-Based L2 Speaking Assessment*.

Once again, congratulations on receiving this award!

(9) **Recommendation for the JLTA Book Award**

JLTA commenced the "**JLTA Book Award**" event in 2020. If there is a book you want to recommend for the award, please check and fill out the rules and templates on the link below, and send them to the Chair of the Book Award Selection Committee. Please refer to the link given below for shipping addresses.

http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page_id=1618

(10) **The JLTA Best Book Award 2023**

Regrettably, there were no nominees that met the criteria for the award this year. We eagerly await your nomination.

(11) **Revision of the JLTA Constitution**

At the General Business Meeting on September 9, a revision of JLTA's constitution was proposed. In order to operate JLTA in accordance with more stringent rules as an academic organization, we are currently in the

process of discussing the matter with legal counsel, with a focus on the arrangement of provisions and the election method of a president and board members. In the near future, we intend to proceed with this via e-mail for deliberation.

(12) **Events Related to Language Assessment**

We will provide information on the research meetings and lectures for which we have received details. Please refer to it.

Forum at the Univ. of Tsukuba
43rd Forum of Modern Languages and Cultures

【Date & Time】
December 2, 2023 (Saturday), 10:00 to 11:00 (20:00 to 21:00, Central Daylight Time)
Online Zoom lecture
【Guest speaker】
Xun Yan (Associate Professor of Linguistics, University of Illinois Urbana-Champaign)
【Title】
"Rater behavior and development in performance-based language assessment"
【Registration】
https://forms.gle/PY9uQ4CW28xCaupn7
【Deadline】
November, 30 (Thursday)
【Contact】
Rie Koizumi (Professor, University of Tsukuba)
Koizumi.rie.ge@u.tsukuba.ac.jp

(13) **Request for Confirmation**

● Have you visited the "My Page" site, where you can check and modify your membership information and check your yearly membership fee payment status? Please contact us if you need your membership number and password, which are necessary details for the login.
https://www.bunken.org/jlta/mypage/Contact

● If you have changes in your affiliation, address, and other information, please update your registered information on "My Page" by the end of March. **In particular, if you have changed your e-mail address or mailing address, please be sure to make the necessary changes.**

● We annually send student members a message asking them to submit a copy of a student certificate.

● If you have not yet paid the yearly membership fee for 2022 and 2023, please do so at your earliest convenience. If you do not pay the fee for 2022, you will receive no shipment or email message from JLTA and will not be able to use the "My Page" site after April 2024.

● If you plan to leave JLTA, please let us know by sending a message to jlta-post@as.bunken.co.jp

JLTA Secretary General
Yuichiro YOKOUCHI
(Hirosaki University)
JLTA Vice Secretary General
Ryoko FUJITA (Juntendo University)
Keisuke KUBOTA (Fukushima Medical University)
Hiroki MAEDA (Matsuyama University)

JLTA Official X (Twitter) account:
@JLTA_official
https://twitter.com/JLTA_official

日本言語テスト学会事務局
〒036-8560 青森県弘前市文京町 1
弘前大学教育推進機構教養教育開発実践センター 横内裕一郎研究室
横内裕一郎研究室（郵送時には必ず研究室名を明記してください）
TEL: 0172-36-2111（代表）
e-mail: u16yoko@gmail.com
URL: http://jlta.ac

編集： 広報委員会
委員長 古賀功（龍谷大学）
副委員長 土平泰子（聖徳大学）
委員
笠原究 （北海道教育大学旭川校）
長沼君主（東海大学）
宮崎啓 （東海大学）